

# 『史記』の歴史観に関する覚書

柴田 昇

A Note on the Idea of History in “ Shiji ”

Shibata Noboru

## 1、はじめに

本稿は、『史記』において描かれている歴史像の全体的な性格を把握するための、初歩的な視点を提示しようとするものである。

『史記』の成立には、複雑な伝承・編集の過程が存在すると考えられるのであり、一貫した編集意図や歴史思想の存在を自明の前提として議論を進めることには注意が必要である。しかし同時に、『史記』という書物が、原資料をそのまま並べるのではなく、ある立場と意識に基づいて資料の取捨選択と配列・記述を行って一つの歴史像を構築しようとしている面があることも明らかだろう。「編集意図」にも様々なレベルがあるのであり、藤田勝久が自覚的に提起しているように、多くの事実の中からいくつかの史実を選び取り配列する、その選択と配列の仕方に『史記』の歴史観を見出すことは可能と思われる<sup>1</sup>。そして個々の歴史的事象に関する事実関係を確定することとは別に、『史記』がその内的世界の中で主張しようとした事実関係の性格を把握すること、換言すれば、『史記』の歴史叙述を支えている世界観の骨格を明らかにすることは、独自の意味を持つ課題たり得るのである。

出土資料の増加により、伝世文献史料の意味を相対化して考えることが可能になった今、あらためて『史記』の内的世界の構造に関する若干の推論を提出するのが、本稿の基本的目的である。

## 2、『史記』本紀の性格

『史記』は、本紀・表・書・世家・列伝の五要素によって構成されているが、これらのうちで、『史記』の歴史像の最も基本的な筋道を示しているのは「本紀」である。

王迹の興るところ、始を原ね終を察し、盛を見、衰を觀、之を行事に論じ考う。略ぼ三代を推し、秦漢を録し、上は軒轅を記し、下は茲に至る。十二本紀を著す。

(太史公自序)

本紀とは、黄帝から司馬遷の生きる漢武帝期までの王者の業績と盛衰を記す部分であり、五

帝・夏・殷・周・秦・秦始皇・項羽・高祖・呂太后・孝文・孝景・孝武の順に配列されている。そして『史記』の本紀に見られる王者の系譜は、基礎的な事実として前近代中国の知識人の思考・歴史意識を規定し、またそれは近代の研究者にとっても基本的枠組みとして強い規定力を持っている。たとえば近年よく話題にされる「夏王朝」の實在に関しても、考古学的発見に対して、それを「夏王朝」であると定義する根拠は要するに『史記』の記述なのである<sup>2</sup>。

さてこのような本紀の構成を見たとき、まず気づくのは本紀が、前半の王朝名・家系を表題とするものと、後半の個人名を表題とするものに分かれることだろう。五帝本紀から秦本紀までは、中華世界の帝王とされる人々の歴史が、王朝単位、すなわち王となった人物の家系単位で記述される。それに対して秦始皇本紀より後は、個人名が前面に出され、王者一代の事跡を述べるのが記事の中心となる。そして王者の記録としての本紀という観点からこのような構成を見たとき特に問題となるのは、表題が王朝名から個人名に切り替わる位置に置かれた秦・秦始皇・項羽という三つの本紀の存在である<sup>3</sup>。

まず『史記』では秦本紀と秦始皇本紀がそれぞれ独立してたてられている。秦始皇帝は中華世界の統一者であり、本紀に列されるのは妥当と考えてよい。それに対して秦本紀は一諸侯に過ぎない秦の歴史を述べた部分であり、世家に列するのが妥当との意見は古くからある。これに関して、本紀の記述原理についての内藤湖南の理解は示唆するところが多い。

元来司馬遷の本紀は、古へ人民に功德のあつた人及びその子孫が帝王となつて国を享ける意味を表はしたのである。周や秦のことを書くのに、一統以前の事にまで遡つて書くのは、後世一統の天子の起るのは、祖先の功德に因るものと見るからであつて、史通の如く本紀を以て後世の単なる編年体の歴史と同一視するのは不可である<sup>4</sup>。

また吉本道雅は、秦本紀の存在を、帝王の治世のみでなくその家系を記述対象とする『史記』の発想からして当然存在すべきものであるとする。そしてその背景には、一個の家系が王朝・諸侯として継続するにはその先祖に何らかの功德があったはずという認識があったことを指摘する<sup>5</sup>。漢代以前においては個人ではなく一つの家系こそが叙述の対象だったとの理解は示唆的である。ただ秦本紀・秦始皇本紀が分かれて存在する意味については、吉本自身も記しているように十分な説明には至っていないようであり、なぜ秦本紀と秦始皇本紀が分立しているのかは明らかではない。体例から言えば、あるいは周代までの例にならって始皇帝の事跡も含めた秦本紀を立てることがより妥当との理解もありえよう。

また、項羽本紀の存在についても問題があり、確かに項羽は秦の滅亡から漢の成立までの政治過程において重要な存在だったが、項羽自身がその期間王・皇帝として君臨したわけでは必ずしもない。項羽は、その活躍した期間の多くに、戦国楚王の末裔である懐王、後の義帝を名目上の君主として戴いていた。これに関して竹内康浩は項羽本紀の贅を根拠として次のように論じる。

…秦を滅ぼしその後の態勢の基礎を作ったのは（劉邦ではなく）項羽である、と司馬遷は考えているということになる。それ故、積極的な意味での「功績」ではないにしても、庶民から出て王朝支配をひっくりかえした古今未曾有の人物という点を評価した、というのが司

馬遷の本意であろう。そして、司馬遷はやはりそうした項羽の業績や運命に人知を越えた何ものかを感じていたのではあり、それ故の本紀扱いなのではないかと考えられる。そうした意味では、司馬遷の考える本紀は、その後の歴史書の本紀に比べ、さらに広いものを含んでいたと言えよう<sup>6</sup>。

秦を滅ぼし後世につながる基礎的体制を作った、即ち歴史的な画期を作ったのが項羽であるという認識を司馬遷が持っていたとの指摘は首肯できる。竹内によれば、項羽が自身は中華世界を支配する帝王ではなかったにもかかわらず本紀に列されているのは、項羽という人物の存在こそが歴史の転換点であるという、太史公の認識を何らかの形で反映しているのである。しかし問題はその「評価」の内実、さらに言えば、太史公の認識・評価を支える論理とは何かということだろう。「人知を越えた何ものか」「さらに広いもの」とはいったい何なのか。

これに関連して藤田勝久は、徳ある王が天命を受け、徳がなくなると天命は移ると位置づける一種の運命観に基づいて『史記』の記述が成立しているとし、「始皇帝は先祖の天命を受けて統一の偉業を成し遂げながら、諫言を聞かない不徳により衰退への転換をむかえ、さらに二世皇帝・子嬰の不徳によって、滅亡は決定的になると位置づけている」とする<sup>7</sup>。そして項羽本紀も「著作の体例にあわない一篇ではなく、むしろ王者の紀年を重視し、天命と地上の行為の関連を原理として示そうとする太史公の立場からすれば、本紀にすることが必然であった」とする<sup>8</sup>。藤田によれば、本紀に反映されているのは「天命」の移動過程であり、「天命」のごとき人知を超えたものと、地上における人間の行動との関連が、王者・王朝の興亡を形作ってゆくとされる。

上に見たように、近代の研究者の多くは、帝王に値しない者が本紀に列されていることをただ批判するのではなく、そのような現象を『史記』の編集意図や思想と関連させて理解しようとしてきた。本節でここまで見てきたのは『史記』をめぐる日本におけるごく一部の研究成果のみであり、取り上げるべき先学の業績はこれのみにとどまらないのであるが、それらのある程度網羅的に検討する作業は別稿に譲らざるを得ない。ここでは、本稿で問題とするテーマに対する理解の仕方として、筆者が継承すべきと考えている先行研究の基本的な考え方を提示したのみである。『史記』本紀においては、王者が王者たることを説明する原理となっているのは、先祖の功德と、「天命」等人知を超えた世界とのつながりであり、それらと王者個人の行動が絡み合う中に『史記』の歴史叙述が成立しているのではないかと推定されるのである。以下、『史記』において物語られている歴史の像を、本紀を中心に再構成してゆこう。

### 3、系譜的世界

秦始皇帝以前における『史記』の主要登場人物は、多くの場合血縁によって結びつけられている。『史記』の内的世界は、黄帝を起点とする血縁的系譜の流れとともに展開する世界である。その世界の中では、王たる者は膨大に枝分かれしながらも起点を一にする血縁的系譜の中に属していなくてはならなかった。そして王に準ずる存在もその多くは同一の系譜上に位置づけられ

ている。しばしば指摘されるごとく、帝王が帝王たり得る原因の一つに、「先祖の功德」があり、帝王は優れた業績を残した帝王の系譜の中からしか生じえないものなのであった<sup>9</sup>。本稿においては、このような血縁による王侯間のつながりを基本的な枠組みとする世界のことをとりあえず「系譜的世界」と読んでおこう。本節では、まず黄帝以来の系譜的世界の像を素描してみたい<sup>10</sup>。

神農氏に代わって諸侯に推された黄帝は、上に述べた系譜的世界の出発点である。黄帝には二五子があったが、黄帝を継いだのは孫に当たる顓頊であった。顓頊の子孫は庶人となり、黄帝の流れをくみながらも系統を異にする帝嚳が後を継いだ。帝嚳の後を承けたのは、子の帝堯であったが、さらにそれを継いだのは、顓頊の末裔たる虞舜であった。以上のように、いわゆる五帝は全て黄帝から始まる系譜の一部に位置付けられる者であり、王位の父子間継承は原則化されていなかったが、その継承は全て黄帝を起点とする血縁的系譜の中で行われた。

この系譜的世界は、五帝の時代が終わって三代に入っても、様々な形で継続する。虞舜に位を譲られ夏王朝を開いたとされる禹は、やはり顓頊の末裔であった。夏に代った殷の祖は契とされるが、その母は帝嚳の次妃とされる簡狄である。そしてまた殷に取って代わる周の祖とされる后稷も、その母は帝嚳の元妃たる姜原であった。いわゆる夏殷周三代も、黄帝に始まる系譜的世界の中で展開するものと、『史記』においてはとらえられていた。この点は、周を滅ぼし皇帝支配を開始した秦においても同様である。女媭は顓頊の末裔であり、その子である大業と、皇帝の父である少典氏の末裔たる女華の間に生まれたのが、嬴氏の祖たる大費であった。

上述の系譜的關係は、いわゆる中華の世界のみにとどまるものではない。『史記』は、一般に夷狄とされる周辺諸民族の起源も中華世界とのかかわりで説明する。たとえば呉は、春秋末期に勃興した南方の一大勢力として『左伝』などの古典に登場するが、その政治・社会の具体像は伝世文献資料からは明らかにし難い。しかし、『史記』においてはその来歴が中国由来であること、具体的には、呉の祖である太伯が、また子の無かった太伯を継いだ仲雍が、いずれも周王とその祖を一にしていることは、自明の事実として記されるのである。このほかにも匈奴を夏の末裔とする記述もあり、『史記』の内的世界においては、中華世界の王が一つの系譜の中から生み出されるものとされていたように、中国周辺世界の王にもその原則は同様に適用されていた。

上述の如く、『史記』においては黄帝を起点とする系譜的世界は夏殷周三代においても継続し、血縁的關係も重要な機能を果たし続けるのであるが、ここで注意しておく必要があるのは、中華世界の王の出現にかかわる男系の切断の問題、いわゆる感生帝説話の問題である。

殷の契は、母を簡狄と曰う。有戎氏の女にして、帝嚳の次妃たり。三人行きて浴し、玄鳥の其の卵を墮せるを見、簡狄取りて之を呑む。因って孕みて契を生む。 (殷本紀)

周の後稷、名は弃、其の母は有邰氏の女なり。姜原と曰う。姜原は帝嚳の元妃たり。姜原野に出で、巨人の跡を見る。之を踐まんと欲す。之を踐みて身動き、孕める者の如し。居ること期にして子を生む。 (周本紀)

秦の先は、帝顓頊の苗裔なり。孫を女媭と曰う。女媭織るとき、玄鳥、卵を隕す。女媭之を呑み、子大業を生む。 (秦本紀)

殷の祖である契の母は帝嚳の次妃簡狄であったが、父は帝嚳ではなかった。周の祖である后稷の母は帝嚳の元妃姜原であったが、父はやはり帝嚳ではなかった。秦の祖である大業の母は顓頊の末裔たる女脩であったが、父はいない。契・后稷・大業という三人の、後に中華世界の支配者となる王朝の起源ともいべき人物たちは、いずれも人間の父を介することなく、巨大な足跡や鳥の卵に感じた母から生まれたとされるのである。各本紀に見えるこれらの記述からすれば、三者いずれも、男系はいったん切断されていると言わなければならない。

黄帝以来の系譜は、夏王朝の成立までは男系の流れとしてその機能を果たしている。しかし、ある時から、それは単純な形では機能しなくなる。その末裔が王者となる者は、異常懐妊によって、それ以前の男系に基づく系譜から差異化されていたことが明らかにされるのである。ただしその際には、黄帝以来の血縁的系譜となんらかの関係をもつ女性が媒介者として常に存在するのであって、そのためそこで発生する断絶は完全なものとはならない。

感生帝説話の原型は『詩経』の段階ですで見え、『呂氏春秋』『楚辞』等にも関連する記述がある。それが『史記』の段階までにどのような過程を経て変遷してきたのかは十分明らかにできないが、『史記』にみえる感生帝説話が同時代のある程度一般性をもった認識に依拠した記述であることは推測可能であるように思われる。異物に感じて帝王を孕む感生帝の説話は、従来の帝王の系譜に新しい要素が混入し、世界の支配を更新するような力をもつ新しい王者の誕生へ向かうプロセスを象徴的に示すものであり、武力革命の背景に、個々の「祖先の功德」を超えた現象が介在するという思想的立場を明らかにするものなのかもしれない。少なくとも、『史記』の作者が世界の變動に対し感生帝という要素の強い影響を認めていたことは否定し難いだろう。いずれにせよ、『史記』の内的世界においては、王朝の成立や王朝間の革命の発生に関して、男系の切断と女性による神的世界との媒介という一般的法則が想定されていたと考えられるのである。

#### 4、秦始皇本紀の性格

始皇二十六年、秦は斉を滅ぼして天下統一を成し遂げた。秦始皇本紀によれば、その際の政策論議の中で丞相王綰等は「諸侯初めて破れ、燕・斉・荆の地は遠し。為に王を置かざれば、以て之を填むることなし。請う、諸子を立てんことを」として、各地に王を立てての封建的統治を主張した。

これに対して廷尉の李斯は、周が子弟を封建したことの失敗を例に挙げ、「今海内は陛下の神靈に頼りて一統され皆郡県と為」り、そのようにすることこそが「安寧の術」であるとする。そして始皇帝は李斯の議を是とし、天下を三十六郡に分けて、いわゆる郡県制の全面的施行を断行した。秦始皇本紀は、始皇三十四年にも淳于越と李斯の間で同様のテーマに関する論争があったことを伝えるが、そこでも始皇帝によって支持されたのは李斯の意見だった。

以上の過程の中で、世襲的・自立的性格の強い諸侯の存在に大きな比重を置く封建制的体制が否定され、「諸侯を以て郡県と為す」郡県制が確立し、始皇帝という一人の王によって一元的に

支配される世界が成立することになった。始皇帝は前節で触れたように、大費の末裔であり、ひいては顛頊の流れをくむ者とされていた。顛頊の末裔は、女脩が鳥の卵に感じることを経て、中華世界の支配を更新する新しい王者として再生・降臨したのである。

しかし、始皇帝の帝国は世界の一元化を永遠に維持し得るものではなかった。いや、そもそも始皇帝は本当に黄帝の流れをくむその末裔だったのだろうか？この問題について、『史記』の記述は必ずしも明瞭ではない。関連する部分をあげておこう。

莊襄王、秦の為に趙に質子たり。呂不韋の姫を見、悦んで之を取る。始皇を生む。秦の昭王四十八年正月を以て邯鄲に生る。生るるに及びて名けて政と為す。

(秦始皇本紀)

呂不韋、邯鄲の諸姫の絶好にして善く舞う者を取って與に居る。身める有るを知る。子楚、不韋に従うて飲む。見て之を悦び、因って起って寿を為し、之を請う。呂不韋怒る。念うに業に已に家を破り子楚の為にするは、以て奇を釣らんと欲すればなりと。乃ち遂に其の姫を献ず。姫自ら身める有るを匿す。大期の時に至り、子政を生む。子楚遂に姫を立てて夫人と為す。

(呂不韋列伝)

秦始皇本紀では、子楚と政の親子関係にことさら疑問が提示されることはない。しかし呂不韋列伝では始皇帝の実の父親が呂不韋である可能性が強く示唆されている。すなわち、子楚が呂不韋から譲り受けた姫は、その時点で呂不韋の子を身ごもっていたことを隠していたとされるのであり、とすれば後にこの姫が生んだ子が、実は呂不韋の子である可能性は非常に高いことになるだろう。

野口定男はこの問題について、伝では始皇帝の真の父が呂不韋とも読めるように記述されているが、史官たる司馬遷の文章としてはいささか曖昧なものになっていることを指摘し、その理由を、呂不韋が始皇の父と断定するには裏付ける史料が不足していたためではないかと推測する<sup>11</sup>。穏当な理解である。しかし本稿で論じてきた系譜的世界の構図を念頭に置けば、呂不韋と始皇帝の関係は『史記』の内的世界においてより重要な意味を持つ事象と考えることも可能だろう。

筆者は、『史記』呂不韋列伝において記される始皇帝の出生に関する説話を、司馬遷によるこの問題への端的な疑問の表明と考える。子楚までの秦王の系譜と始皇帝とのつながりについて、司馬遷は十分な信頼感を持つことができなかつた。そして『史記』が帝王の出現に先祖の功德や神的世界とのつながりの存在を前提とする限り、これは基礎的な歴史観に関わる重大問題であり、その疑念は『史記』の中に何らかの形で表現されねばならなかつた。いわば呂不韋列伝は、本紀の構成に対する一種の謎解きとして機能しているのである。そしてそのように考えれば、『史記』の提示する歴史像の中で、始皇帝という存在の持つ意味も明確になってくるのではないか。始皇帝とは、黄帝の末裔を僭称する、男系的系譜の切断の結果出現した君主なのである。

ここにおいて、秦始皇本紀が秦本紀から独立している理由の一つが推測可能となる。上述した、王朝の成立や王朝間の革命の発生に関する男系の切断と女性による神的世界との媒介と

いう一般的法則は、始皇帝に当てはまるものなのかどうか、『史記』の作者はそれに対して否定的な理解をしているのであり、始皇帝は、黄帝の末裔として六国に対峙していた歴代の秦王とはそもそも異質な存在なのであった。史実として始皇帝は確かに巨大な仕事をし卓越した業績を有する人物であり、それを排除した歴史叙述は成り立ち得ない。しかしその存在が成立する過程には、傑出した「先祖の功德」も、感生帝説話も介在していない。始皇帝の存在は限りなく不安定である。秦の滅亡は、中華世界における古代以来の王侯系譜、換言すれば本稿でいう「系譜的世界」がいったん消滅したことを意味するが、実はそれは始皇帝が旧六国を滅ぼした時すでに消滅していたのかもしれないのである。そしてそうであるとすれば、二世皇帝以後の顛末が秦始皇本紀の一部とされていることもまた必然的だろう。秦始皇本紀とは、いわば黄帝の末裔を僭称する一族の記録なのであった。

## 5、項羽と劉邦

秦が滅亡に至る過程を述べるにあたって『史記』が中心人物と位置づけたのが項羽である。項羽本紀の中に陳嬰による次のような言葉が記されている。

項氏は、世世将家にして、楚に名有り。今、大事を挙げんと欲するに、將、其の人に非ざれば不可なり。我、名族に倚らば、秦を滅ぼさんこと必せり。

項羽という人物は、楚に將の家として知られた系譜に属する人物であり、周囲に集まっている人々も、項羽個人の能力と同時に、その背後にある系譜的關係への信頼を媒介として結集している。ここでも、かなり小規模ではあるが、男系的原理は引き続き強調されている。そもそも項羽の軍団が衆望を得たのも、楚の子孫を立てて王とし楚国を復興しようとしたからであり、黄帝以来の系譜的世界は項羽の活動の背後にあって強い規定力を持ち続けている<sup>12</sup>。

項羽本紀によれば、まず彼は、楚国復興を旗印に著しい軍事的成果を挙げ、さらに劉邦が安置した秦の都を徹底的に略奪・破壊する。また「天下を分裂し、而して王侯を封」じ、封建制的体制の再生に取り組む。しかしさらに後には、「義帝を放逐し、自立」することで帝の權威を失い、その結果政權は求心力を喪失し、最終的には劉邦によって滅亡させられるにいたる。いわば項羽は、系譜的世界の再生をもくろむことにより中華世界の中心に躍り出た。しかし政治的中心としての項羽は、やがて名実ともに王として君臨することを目指すようになり、結局その試みは短期間で挫折する。

項羽の急速な勃興を『史記』は次のように評する。

夫れ秦、其の政を失い、陳涉難を首め、豪傑讜起し、相い與に並び争うもの、数うるに勝る可からず。然れども羽尺寸を有つに非ずして、勢いに乘じ隴畝の中より起こる。三年にして、遂に五諸侯を率いて秦を滅ぼす。天下を分裂し、而して王侯を封ず。政は羽より出で、号して霸王と為す。位終わらざると雖も、近古以来未だ嘗て有らざるなり。

(項羽本紀)

項羽は多くの豪傑が蜂起する中で、何ら基盤を持たずにたちまち頭角をあらわし、秦を滅ぼし

天下に号令して霸王となったが、このようなことは前例がないという。そしてこのような項羽の驚異的な業績が可能になった理由を説明するのに、『史記』は次のような説明を動員する。項羽本紀の末尾で突如として、一つの目に二つの瞳という身体的特徴によって、項羽と舜とのつながりが暗示されるのである。

太史公曰く、吾之を周生に聞く、曰く、舜の目は蓋し重瞳子なりと。また聞く、項羽もまた重瞳子なりと。羽は豈に其の苗裔ならんか。何ぞ興ることの暴かなるや。

(項羽本紀)

項羽は、古帝王の一人である舜と同じように、一つの目に二つの瞳を持っていたとされる。項羽の速やかな勃興は、彼が舜の末裔である可能性が暗示されることによって、理解可能なものとして『史記』の中に位置づけられる。項羽を排除しては、この時期の中華世界の動向は説明し難い。そしてそれが「項羽」本紀という形で立てられていることは、一つには権力の実質的な所在によるものであったろうが、もう一つ、項羽が舜の末裔との伝承を持つ存在だったことも関係していただろう。筆者は、項羽が本紀に列された根拠の少なくとも一つを、黄帝以来の系譜的世界とのつながりに見たい。

しかし、史官としての司馬遷の精査によっても、項羽を黄帝に始まる系譜と結びつける材料はごくわずかししか発見できなかった。『史記』の内的世界においては、項羽は黄帝の末裔であることを暗示される存在にとどまっている。黄帝以来の系譜的世界は項羽の行動を規定したが、項羽個人はその末裔という自らの位置を十全には示すことのできない、傑出した先祖の功德や、異常な生誕による他者との差異化があったことを確定できない存在なのであった。

始皇帝の場合と同じように、『史記』の内的世界における項羽の存在はやはり不安定である。項羽本紀とは、いわば、五帝の末裔としか考えられないような業績を上げそれを示唆する身体的特徴を有していながら、その系譜上の位置を確定する根拠を持ち合わせない存在に関する本紀なのである。

始皇帝・項羽に代って新しい世界を構築する役割を負わされるのが劉邦である。高祖本紀冒頭部の記事を見よう。

高祖は、沛の豊邑中陽里の人なり。姓は劉氏、字は季。父を太公と曰い、母を劉媪と曰う。其の先、劉媪、嘗て大澤の陂に息い、夢に神と遇う。この時雷電して晦冥なり。太公往きて視れば、則ち蛟龍を其の上に見る。已にして身める有り。遂に高祖を生む。

「太公」は父に対する尊称、「劉媪」は劉ばあさん程度の意味であり、正確な名前はわからない。劉邦は、漢帝国の開祖でありながら父母の名さえも明らかではない、古い系譜的世界から完全に切断された存在だった。

そして高祖本紀はこの後に「仁にして人を愛し施しを喜」む劉邦のキャラクターと同時に、その異能を伝える様々な伝承を記す。例えば飲み屋で眠りこける劉邦をみた店の主人は「其の上に常に龍有るを見、之を怪」しんだという。また劉邦は独自の雲気を持つ人物と認識されていたようであり、始皇帝は「東南に天子の氣有り」といい、妻の呂后は山中に隠れた劉邦に対して、



「季の居る所の上に常に雲気あり。故に従い往き常に季を得たり」と言ったとされる。項羽本紀には范増の言として「吾、人をして其の気を望ましむるに、皆、龍虎にして五采を成すと為す。此れ天子の気なり」とある。『史記』の内的世界において劉邦を支えるものは、個人的人格的能力と、龍の子とされ独自の雲気を有することに象徴される異能性に限定されており、そこに黄帝の系譜とのつながりを見出すことはできない。これ以前の感生帝説話とは異なった、旧来の帝王の系譜とは無関係な新しい感生帝説話がここに生みだされた。そして漢帝国という、劉氏によって継承される新しい系譜的世界がスタートすることになる。

ただここでも、王朝の成立や王朝間の革命の発生に関する男系の切断と女性による神的世界との媒介という一般的法則が貫かれていることには注意が必要である。すなわち劉邦の母は蛟龍に感じて異常懐妊したとされるのであり、漢帝国の成立においても、黄帝以来の系譜的世界のそれと共通する血縁的系譜関係と性役割の構図を見出すことができるのである<sup>13</sup>。

ここまで論じてきたことをまとめておこう。『史記』は中国の歴史を、男系の切断と女性による神的世界との媒介による王朝交代・革命の発生という一般的法則が貫かれる世界としてとらえている。そしてそこで描かれている歴史像は、二つの大きな時代の交代として理解できるだろう。前半は、五帝に始まりその筆頭である黄帝の系譜的關係の中で展開する旧世界の時代である。後半は、劉邦に始まり司馬遷の時代においても継続中の漢の時代である。劉邦は、『史記』において、彼自身から始まる新しい系譜的世界の祖として、黄帝とならぶ存在と位置づけられることになった。漢帝国は、劉氏でなくては王になれない、劉邦を起点とする血縁の帝国である<sup>14</sup>。始皇帝と項羽は、旧世界の残滓を身にまといながら、しかも上記の一般法則の埒外にあって、この二つの時代をつなぐまさに結節点に位置している。

このような観点から見れば、『史記』に秦始皇本紀・項羽本紀のある理由もあらためて推定可能となるだろう。始皇帝は、黄帝の末裔たることを確定できないあいまいな存在であり、秦本紀に秦の王たちと同列に並べることはできなかった。始皇帝の天下統一という事実は、そのような人物から始まる家系の記録を要請し、そのため秦始皇本紀は独立して存在することになった。

項羽もまた、黄帝の系譜上にあることを証明し難い不安定な存在だった。しかし項羽は、舜の末裔と考えられる身体的特徴をもっていた。『史記』は、項羽の軍事的成功を、舜の末裔という背景を有する可能性を持つものとして理解したのであり、それは項羽が本紀に列される一根據となった。

司馬遷は、黄帝と劉邦から始まる二つの系譜的世界と、その間をつなぐ過渡的世界を基本要素として、『史記』の歴史像を構築した。そして過渡的世界を構成する二つの本紀、すなわち黄帝以来の系譜に属することが十全には証明できない秦始皇・項羽に関する本紀は、それ以前のものと異なり、系譜の一表現たる王朝名ではなく、個人の人物名を表題に掲げられることになったのである。

## 6、結びにかえて

本稿では、『史記』という書物が構築されるに当たりその骨格を成した最も基本的な歴史観のあり方を、本紀の構成をたどる中で推論してきた。『史記』は黄帝と劉邦から始まる二つの系譜的世界と、その間をつなぐ過渡的世界を基本要素として成立している書物である。いわば『史記』における歴史は、一つの系譜の中で展開された王位の交代史がいったん崩壊し、若干の過渡期を経て新しい系譜的世界が成立することを寿ぐ、再生の物語として構築されていると言えるだろう。そういった意味から、『史記』の執筆の目的が基本的には漢王朝賛美にあるとする説は妥当と考える。劉邦は、『史記』の内的世界においては、古い系譜的世界の祖である黄帝と並び立つ新しい世界の起源として位置づけられている。

ここで、呂太后本紀について付言しておく必要があるだろう。呂后は漢の高祖劉邦の糟糠の妻だが、高祖の死後帝国の実権を握り、『史記』においては名目上の皇帝をさしおいて本紀に列されている。筆者は呂后を、劉邦に始まる新しい系譜的世界の攪乱者・破壊者として出現したものと位置づけたい。呂太后本紀には呂后がさまざまな手段で劉氏の系譜を縮小し、呂氏を高位に列して行こうとする記事が頻見する。司馬遷は呂后を、劉氏にかわるさらに新しい系譜的世界の開祖になろうとし、実現の可能性も手中にしながら、その構想の頓挫した人物として位置づけているのであり、それ故に本紀に列されているのだと考えてみたい。

本稿は、「系譜的世界」という概念を用いて『史記』の歴史観を提示しようとしたが、『史記』が現在見られる形で存在していること背景には、本稿では論じ得なかった他の多くのファクターがあると考えられるのであり、ここで示し得たものは『史記』という多面的構築物のごく限られた側面にとどまるだろう。また、近年の出土史料の急増により戦国秦漢史研究は新しい段階に入り、伝世文献資料の記述を出土史料によって相対化して理解する試みも様々な角度から行われている。しかしそのような状況においても、前漢中期以前の中国史を構想する時『史記』が持つ資料的価値は未だ揺らぐことはなく、われわれは中国古代史を『史記』というフィルターを通して考えてゆかざるを得ない。本稿はそのフィルターそのものの性格を理解しようとするごく初歩的な試みであり、多くの推測を含む現段階におけるとりあえずの覚書に過ぎない。

<sup>1</sup> 藤田勝久『史記戦国史料の研究』（東京大学出版会、1997）474頁。

<sup>2</sup> 夏王朝についての概観と研究の現状については、岡村秀典『夏王朝 王権誕生の考古学』（講談社、2003）。

<sup>3</sup> 伊藤徳男『『史記』本紀の構成』（『東北大学教養部紀要』15、1972）では問題をはらむ篇として五帝本紀・秦本紀・項羽本紀・呂后本紀が挙げられている（59～63頁）。また伊藤徳男『史記の構成と太史公の声』（山川出版社、2001）にも本紀の構成に関する簡明な言及があり参照すべきである（56～62頁）。

- <sup>4</sup> 内藤湖南『支那史学史』(『内藤湖南全集』十一巻、筑摩書房、1969、1949初出)122頁。
- <sup>5</sup> 吉本道雅『史記を語る』(東方選書、1996)200~201頁。
- <sup>6</sup> 竹内康浩『「正史」はいかに書かれてきたか』(大修館書店、2002)66頁。
- <sup>7</sup> 藤田勝久「始皇帝と秦王朝の興亡 - 『史記』秦始皇本紀の歴史観 - 」(『愛媛大学人文学会創立二十周年記念論集』1996)147頁。
- <sup>8</sup> 藤田勝久『「史記」項羽本紀と秦楚之際月表 - 秦末における楚・漢の歴史評価 - 」(『東洋史研究』54 - 2、1995)52頁。
- <sup>9</sup> これについては前節で若干触れた。それ以外にたとえば稲葉一郎『中国の歴史思想』(創文社、1999)第二章では、「王者はいずれも聖賢またはその苗裔に属し、その位はその祖先または当人が善徳・善行を積み、その積み重ねの報賞として子孫または当人に与えられるものと考えられた」(110頁)とする。
- <sup>10</sup> 本節の議論と深く関連するものとして、高木智見『先秦の社会と思想 - 中国文化の核心』(創文社、2001)第一部をあげておきたい。また柴田昇「血族と歴史の原像 - 高木智見著『先秦の社会と思想 - 中国文化の核心』を読む - 」(『名古屋大学東洋史研究報告』29、2005)でも、本稿と関連する若干の議論を行った。
- <sup>11</sup> 野口定男「始皇帝の出生と呂不韋」(『史記を語る』研文出版、1980、1959初出)191~192頁。
- <sup>12</sup> 項羽本紀には范増の言として「今、君、江東に起こり、楚の讎午の將、皆争いて君に付きしは、君世世楚の將たりて、能く復た楚の後を立つと為すを以てなり」とある。
- <sup>13</sup> 安居香山「感生帝説の展開と緯書思想」(『緯書の成立とその展開』後篇三章、国書刊行会、1979)は、高祖を殷・周・秦の始祖並みの位置に置くために感生帝説の付与が必要とされたとする(421~422頁)。
- <sup>14</sup> 『史記』呂后本紀には、劉邦が諸侯と結んだ盟の言葉として「劉氏に非ずして王たれば、天下共に之を撃て」とある。また同本紀中で、呂後も高祖の約の中に「劉氏に非ずして王たる者は、天下共に之を撃て」とあったことに言及している。

#### 〔付記〕

本稿は2003年度愛知江南短期大学特別研究費による研究成果の一部である。

柴田 昇  
〒489 - 8086 愛知県江南市  
高屋町大松原172番地  
愛知江南短期大学  
教養学科